

蘇集源流考

原田, 愛
九州大学大学院人文科学研究院 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/1462141>

出版情報 : 中国文学論集. 42, pp.51-65, 2013-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

蘇集源流考

原田 愛

北宋の文人蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士）は生前から沢山の愛読者を獲得したが、その読者が手にした彼の別集はどのようなものであったのか。蘇軾の基本的なテキストである『東坡七集』については、三歳下の実弟蘇轍（字は子由、号は穎濱遺老）の撰述した蘇軾の墓誌銘に、以下のように記されている。

至其遇事、所爲詩・騷・銘・記・書・檄・論・議、率皆過人。有『東坡集』四十卷、『後集』二十卷、『奏議』十五卷、『内制』十卷、『外制』三卷。公詩本似李杜、晚喜陶淵明、追和之者幾遍、凡四卷。

其れ事に遇ふに至り、爲る所の詩・騷・銘・記・書・檄・論・議は、率ね皆人に過ぐ。『東坡集』四十卷、『後集』二十卷、『奏議』十五卷、『内制』十卷、『外制』三卷有り。公の詩は本もと李杜に似たり、晩は陶淵明を喜び、之に追和する者幾遍、凡そ四卷なり。蘇轍「亡兄子瞻端明墓誌銘」（『欒城後集』卷二十二）

このうち、『東坡集』及び『奏議集』・『内制集』・『外制集』は蘇軾の自編であり、それらは生前から既に編纂され、刊行されていた。『東坡後集』は末子の蘇過（字は叔党、号は斜川居士）による補撰が行われた可能性が高く、後に『七集』の一つとなる『東坡應詔集』も、蘇軾の歿後にまとめられたと考えられている。また、『東坡先生和陶淵明詩』（以下、『和陶詩集』と略）は、蘇軾逝去の当初は書名も定まらず、墓誌銘にもただ「四卷」と見えるのみである。『四部備要』等は『和陶詩集』に代わって『東坡續集』を挙げて『東坡七集』とする。

本論では、特に蘇軾の文学作品を収めた『東坡集』『東坡後集』及び『和陶詩集』の編纂活動と成立過程について、蘇軾の前半生と後半生とに分けて系統的に論述する。それによって、蘇軾文学の源流の様相を明らかにしたい。

一 蘇軾前半生の編纂活動——『東坡集』編纂までの過程

蘇軾の『東坡集』は、詩について云えば、嘉祐六年（一〇六一）作の「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之」（以下、「鄭州馬上別子由詩」と略）を筆頭に、元祐六年（一〇九二）作の「書渾令公燕魚朝恩圖」を末に置く。その他の散文などに鑑みても、編纂時期は元祐六、七年（一〇九一、一〇九二）頃であろう。そして、下図に示すように、蘇軾も同時期に別集『欒城集』を編纂した。また、蘇軾が「鄭州馬上別子由詩」以前の作品を習作として『東坡集』から除外した一方で、蘇軾はその頃の詩三十首を『欒城集』巻一に収録した。³⁾

編纂時期	作者	年齢	文集名	所収の詩文の制作期間
元祐六年（一〇九二）頃	蘇軾	56	『東坡集』四十卷	嘉祐六年（一〇六一）～元祐六年（一〇九二）
元祐六年（一〇九二）	蘇軾	53	『欒城集』五十卷	嘉祐四年（一〇五九）～元祐六年（一〇九二）
元符三年（一一〇〇）頃	蘇軾・蘇轍	65・62	『和陶詩集』四卷	元祐七年（一〇九二）～建中靖国元年（一一〇二）
元符三年（一一〇〇）頃	蘇軾	65	『東坡後集』二十卷	元祐六年（一〇九二）～建中靖国元年（一一〇二）
崇寧五年（一一〇六）	蘇軾	68	『欒城後集』二十四卷	元祐六年（一〇九二）～崇寧五年（一一〇六）
政和元年（一一一一）	蘇軾	73	『欒城三集』十卷	崇寧五年（一一〇六）～政和二年（一一一一）

(一) 初期の蘇轍との唱和集

『東坡集』以前の、ごく初期の蘇軾の詩文集は、ほぼ「唱和集」の形式であった。以下の二集である。⁽⁴⁾

(1) 『南行集』一卷（蘇洵・蘇軾・蘇轍共編、嘉祐四年（一〇五九）十月～嘉祐五年（一〇六〇）二月）

(2) 『岐梁唱和詩集』（蘇軾・蘇轍共編、嘉祐六年（一〇六一）十一月～治平二年（一〇六五）正月）

まず、(1)『南行集』について略述する。嘉祐四年（一〇五九）冬、亡母程氏の喪を除した蘇軾たちは、故郷の眉州眉山から上京した。『南行集』は、そこから嘉祐五年（一〇六〇）二月に到着するまでの三蘇の詩文一百七十三篇をまとめたものである。つまり、『南行集』には、「鄭州馬上別子由詩」以前の詩が収録されていた。蘇軾によって『東坡集』から除外されたにも関わらず、それらの詩文が今に流伝しているのは、『南行集』が刊行されていたためであろう。蘇軾は『南行集』の序文にて、次のように総括した。

己亥之歳、侍行適楚、舟中無事、博奕・飲酒、非所以爲閨門之歡。而山川之秀美、風俗之朴陋、賢人君子之遺跡、與凡耳目之所接者、雜然有觸於中、而發於咏歎。蓋家君之作與弟轍之文皆在、凡一百篇、謂之『南行集』。將以識一時之事、爲他日之所尋繹、且以爲得於談笑之間、而非勉強所爲之文也。時十二月八日、江陵驛書。己亥の歳、行に侍りて楚に適き、舟中事無く、博奕・飲酒は、以て閨門の歡を爲す所に非ず。而して山川の秀美、風俗の朴陋、賢人君子の遺跡は、凡そ耳目の接する所の者と、雜然として中に触るる有りて、咏歎を発す。蓋し家君の作と弟轍の文皆在り、凡そ一百篇、之を『南行集』と謂ふ。將に一時の事を識るを以て、他日の尋繹する所と爲し、且つ以爲へらく談笑の間に得て、勉強して爲る所の文に非ざるなり。時に十二月八日、江陵驛に書す。

蘇軾「南行前集叙」（『東坡集』卷二十四）

この序文は、道中の嘉祐四年（一〇五九）十二月八日、江陵において書かれた。蘇軾たちは、主に「山川の秀美、風俗の朴陋、賢人君子の遺跡」を堪能しつつ、思いのままに創作したのであった。

開封に到着した後、蘇軾・蘇轍は制科に応じ、蘇軾は第三位、蘇轍は第四位という好成績で合格し、嘉祐六年（一

○六一)十一月、蘇軾は簽書鳳翔府節度判官庁事に任ぜられたことで、本格的に高級官僚としての道をスタートさせた。(2)『岐梁唱和詩集』は、この鳳翔府任官の時期に、開封府にて蘇洵の補佐をしていた蘇轍と応酬した作品を収めたもので、その書名は両者の居た岐州(鳳翔府)と梁州(開封府)に因んだのであろう。そして、鳳翔府に赴任する途上で詠まれた「鄭州馬上別子由詩」は、蘇軾が自ら習作期を脱したと見なす記念碑的な詩であった。

不飲胡爲醉兀兀 此心已逐歸鞍發 飲まざるに胡な為すぞ酔ひて兀兀たる、此の心 已に歸鞍を逐ひて発す。

歸人猶自念庭闈 今我何以慰寂寞 婦人すら猶ほ自ら庭闈を念ふ、今我何を以てか寂寞を慰めん。

登高回首坡隴隔 惟見烏帽出復沒 登高して首を回らせば坡隴隔たり、惟だ見る烏帽の出でて復た没するを。

苦寒念爾衣裘薄 獨騎瘦馬踏殘月 苦寒に念ふ 爾なごの衣裘薄くして、独り瘦馬に騎りて残月を踏むを。

路人行歌居人樂 僮僕怪我苦悽惻 路人は行歌し 居人は樂しみ、僮僕は我の苦はなだ悽惻たるを怪しむ。

亦知人生要有別 但恐歲月去飄忽 亦た知る 人生に要かち別れ有るを、但だ恐る 歲月去りて飄忽たるを。

寒燈相對記疇昔 夜雨何時聽蕭瑟 寒燈に相對して疇昔を記す、夜雨 何れの時にか蕭瑟たるを聴かん。

君知此意不可忘 慎勿苦愛高官職 君此の意の忘るべからざるを知らば、慎んで高官の職を苦愛する勿れ。

蘇軾「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之」(『東坡集』卷一)

詩題に示すように、蘇軾は、鄭州まで見送りに来てくれた蘇轍の帰路を心配して詩を寄せた。その際、兄弟共に隠遁する未来を象徴する「夜雨対牀」に言及しつつ、「君 此の意の忘るべからざるを知らば、慎んで高官の職を苦愛する勿れ」と詠んだように、無闇に高官を望む浅慮を戒めたのである。この詩を巻頭としたであろう『岐梁唱和集』は、兄弟の前途への希望と自戒、そして、遠くに在って思い合う友悌を詠んだ唱和集であったと思われる。

鳳翔府の任期を終えた蘇軾は、治平元年(一〇六四)十二月、開封府に向かい、翌年正月に帰着した。しかし、治平三年(一〇六六)四月に蘇洵が逝去したため、熙寧元年(一〇六八)まで眉州に戻って喪に服した。熙寧二年(一〇六九)に再び上京して、尚書省(南省)に属する監官誥院の任に就いた。そこで、当時の蘇軾と国子監説書で

ある陳州州学教授の蘇轍の間で交わされた『南省説書』という唱和集が後代に編纂された。これは、元代に編纂された『宋史』芸文志に記載があり、大体熙寧二年（一〇六九）二月から熙寧四年（一〇七二）六月までの作品が収録されていたと考えられる。そして、先行の『南行集』『岐梁唱和詩集』を踏襲して編纂された可能性が高い。

（Ⅱ）門人による別集編纂——陳師仲

治平三年（一〇六七）に即位した神宗は、翌熙寧元年（一〇六八）に王安石を抜擢して新法を推し進めた。それに反対した蘇軾は、地方への任官を求め、熙寧四年（一〇七二）六月に杭州通判、熙寧七年（一〇七四）九月に知密州軍州事、熙寧十年（一〇七七）二月に知徐州軍州事に任ぜられた。以後、蘇軾自身が書名を決定したかは定かではないが、それぞれの任地における詩文を取録した「二官一集」のスタイルの別集が編纂された。

- (3) 『錢塘集』三卷（編纂者不詳、熙寧四年（一〇七二）六月～熙寧七年（一〇七四）九月）
- (4) 『超然集』（陳師仲編、熙寧七年（一〇七四）九月～熙寧九年（一〇七六）十一月）
- (5) 『黃樓集』（陳師仲編、熙寧十年（一〇七七）二月～元豐二年（一〇七九）三月）

(3) 『錢塘集』は杭州の書肆による出版と思われるが、当時、広く読まれていた。後に烏台詩案の際に御史台が蘇軾の罪の証拠物件として提出しており、それに拠れば、正式な書名は『元豐續添蘇子瞻學士錢塘集』という。

また、(4) 『超然集』は密州に蘇軾が築いた「超然台」に因んだものと判る。(5) 『黃樓集』の「黃樓」も、徐州において黄河の治水を行った後に築いた高樓の名である。この二集を編纂したのは、蘇門六君子の一人である陳師道（字は履常）の兄で、同じく蘇軾の門下であった陳師仲（字は伝道）である。黄州に流謫された頃に蘇軾が陳師仲に送った書簡に次のように述べられている。

軾頓首再拜錢塘主簿陳君足下。曩在徐州、得一再見。……先吏部詩、幸得一觀。輒題數字、繼諸公之末。見爲編述『超然』『黃樓』二集、爲賜尤重。從來不曾編次、縱有一二在者、得罪日、皆爲家人婦女輩焚毀盡矣、不知今乃在足下許。當爲刪去其不合道理者、乃可存耳。

軾頓首して錢塘主簿陳君足下に再拜す。曩徐州に在りしとき、一再見を得たり。……先の吏部の詩、幸ひにして一觀を得たり。輒ち数字に題するに、諸公の末を繼ぐ。見るに『超然』『黄樓』二集を編述するを為し、為に尤も重きを賜ふ。從來曾て編次せず、縦ひ一二在る者有るも、罪を得たる日、皆家人婦女輩の為に焚毀して尽くし、今乃ち足下の許に在るを知らず。当に為に其の道理に合わざる者を刪去し、乃ち存するべきのみ。

蘇軾「答陳師仲主簿書」（『東坡集』卷三十）

ここから、陳師仲が『超然集』『黄樓集』を編纂して蘇軾に贈ったこと、「從來曾て編次せず」とあるように、それまで蘇軾自身は別集を編纂したことがなかったこと、蘇軾も民間に巡回していた自らの詩文集を所有していたが、烏台詩案によって家人のために「焚毀」したこと、そして、陳師仲はそうした詩文集を基礎にしつつ、「道理に合わざる」詩文を削除して編纂を行ったことなどが判る。また、『錢塘集』はその書名から勿論であるが、陳師仲もまた杭州錢塘県主簿であったことから、(3) (5)の三集はみな杭州における刊行であったと推察する。

元豊八年（一〇八五）三月、新法改革を推進していた神宗が崩御し、翌元祐元年（一〇八六）、哲宗の即位とともに旧法党を支持する太皇太后高氏による垂簾政治が始まった。所謂「元祐更化」の時代である。それに伴い、蘇軾も中央に礼部郎中として召還され、中書舍人、翰林侍讀学士兼知制誥などを歴任する一方、党内抗争である洛蜀の党議を受けて地方官に転出することもあった。この元祐年間（一〇八六～一〇九三）は、蜀党の領袖と見なされ、時に批難されたが、蘇軾の生涯全体から見ただけの場合には比較的穏やかな時期である。その元祐更化の終焉が見え始めていた元祐七年（一〇九二）頃、蘇軾は、陳師仲に次のように書き送った。

錢塘詩皆率然信筆、一一煩收錄、祇以暴其短爾。某方病、市人逐於利、好刊某拙文。欲毀其板、矧欲更令人刊邪。當俟稍暇、盡取舊詩文、存其不甚惡者、爲一集。

錢塘の詩は皆率然として筆に任せ、一一煩たるも収録するは、祇だ以て其の短を暴くのみ。某は方に病む、市人の利を逐ひて、好んで某の拙文を刊するを。其の板を毀さんと欲するに、矧んや更に人をして刊せしめんと

欲するをや。当に稍暇を俟ち、尽く旧の詩文を取り、其の甚く悪しからざる者を存して、一集と為さん。

蘇軾「答陳傳道五首」第二簡（『蘇軾文集』卷五十三）⁽⁸⁾

蘇軾は、知杭州軍州事であった元祐四年（一〇八九）三月から元祐六年（一〇九一）二月までの間の詩文の編纂を、陳師仲に依頼した。民間に流布していた蘇軾の別集には、誤字脱字があるのみならず、他人の詩文を加えて水増しされていることもあった。そうした情況に強い忌避感を持っていた蘇軾は、かつて『超然集』及び『黃樓集』という優れた別集を刊行した陳師仲の才を高く評価し、新たな別集編纂を希望したのである。

（Ⅲ）代表的な別集の変遷——『眉山集』から『東坡集』へ

蘇軾の故郷である「眉山」を冠する『眉山集』は、当時の資料に鑑みると、『東坡集』が出版されるまでは、蘇軾の代表的な別集と見なされていた⁽⁹⁾。また、(3)『錢塘集』と同様に蘇軾本人の承認のないものであったらしい。

(6)『眉山集』（編纂者不詳、嘉祐四年（一〇五九）〜熙寧年間（一〇六八〜一〇七八）末頃か）

王安石はこの(6)『眉山集』によって蘇軾詩を鑑賞しており、「讀『眉山集』次韻雪詩五首」（『臨川文集』卷十八）などの詩を詠んだ。また、隣国の遼にもこの『眉山集』が伝わったことを、蘇轍が言明している。

本朝民間開版印行文字、臣等竊料北界、無所不有。臣等初至燕京、副留守邢希古相接送、令引接殿侍元辛傳語臣轍云「令兄内翰謂臣兄軾『眉山集』已到此多時、内翰何不印行文集。亦使流傳至此。」……臣等因此料本朝印本文字、多已流傳在彼。其間臣僚章疏及士子策論、言朝廷得失・軍國利害、蓋不爲少。兼小民愚陋、惟利是視、印行戲褻之語、無所不至。若使盡得流傳北界、上則洩漏機密、下則取笑夷狄、皆極不便。訪問此等文字販入塞外、其利十倍。人情嗜利、雖重爲賞罰、亦不能禁。……

本朝民間の開版印行の文字、臣等竊かに北界を料るに、有らざる所無し。臣等初めて燕京に至り、副留守邢希古相ひ接送するに、殿侍元辛をして引接せしめて臣轍に伝語して云ふ「令兄内翰謂臣軾の『眉山集』は已に

此に到ること多時なるに、内翰は何ぞ文集を印行せざる。亦た流伝せしめて此に至らん」と。……臣等此に因りて本朝の印本文字を料るに、多くは已に流伝して彼に在り。其の間臣僚の章疏及び士子の策論、朝廷の得失・軍国の利害を言ふこと、蓋し少なしと為さず。兼ねて小民の愚陋、惟だ利是れのみ視て、戲褻の語を印行して、至らざる所無し。若し尽く北界に流伝するを得せしむれば、上は則ち機密を洩漏し、下は則ち夷狄を取笑し、皆極めて便ならず。訪問するに此等の文字塞外に販入すれば、其の利は十倍なり。人情は利を嗜むに、賞罰を為すを重んずと雖も、亦た禁ずる能はず。……

蘇轍「北使還論北邊事劄子五道 一論北朝所見於朝廷不便事」〔欒城集〕卷四十二

元祐四年（一〇八九）八月、蘇轍は、賀遼国生辰国信使として遼に向かい、翌元祐五年（一〇九〇）正月に帰国した。これは、同年二月作の報告と諫言である。ここで、蘇轍は、蘇軾の『眉山集』が以前から遼に流伝して人気を博していることを述べ、蘇軾ほか官僚たちの「章疏」や「策論」などに記載された国家機密の漏洩を危惧した。そこで、彼は州ごとに「文学官二員」を置いて監督するという対応策を上申したのである。蘇轍によると、蘇軾の『眉山集』などは「塞外に販入すれば、其の利は十倍」であったという。蘇轍は、機密保持の観点から現状に危機感を懐きつつも、蘇軾の名声が国を越えて鳴り響いていることを誇って詩に賦した。

誰將家集過幽都

逢見胡人問大蘇

誰か家集を將て幽都を過ぎらん、逢見す胡人の大蘇を問ふを。

莫把文章動蠻貊

恐妨談笑卧江湖

文章を把りて蛮貊を動すこと莫かれ、恐らく談笑を妨げて江湖に卧さん。

蘇轍「神水館寄子瞻兄四絶其三 十一月二十六日是日大風」〔欒城集〕卷十六

前掲の上書にも言及があるが、持読学士の王師儒などの遼の要人は、三蘇の詩文を好み、特に蘇軾を敬愛して、「恨未見公全集（恨むらくは未だ公の全集を見ず）」と述べ、『眉山集』の続刊や蘇軾全集の有無を尋ねた。該詩においても、遼の人々は「家集」、これも『眉山集』を指すのであろうが、それを持って「大蘇」である蘇軾のことを質

問したという。このように、『眉山集』は、宋の士大夫だけでなく遼においても広く読まれたのである。

元祐六、七年（一〇九二、一〇九三）頃、蘇軾は『東坡集』四十巻を編纂した。元祐七年（一〇九二）は「和陶詩」の創作を開始するなど、致仕を意識し始めていた時期であり、『東坡集』の編纂は、前半生の集大成を行う表徴であったであろう。また、『東坡集』は京師本があり、蘇氏一家もそれを所有していたが、南宋期の記録では杭州本に移行していったらしい。蘇軾の曾孫である蘇嶠が『東坡別集』四十六巻を編纂した際も、杭州本を底本とした。¹⁰また、『東坡集』が通行することで、(6)『眉山集』は勿論、それ以前の(1)～(5)の詩文集も次第に世間から消えていき、散佚した。逆に言うと、『東坡集』はこれらの成果を踏まえて成立したのである。

二 蘇軾後半生の編纂活動——『東坡後集』『和陶詩集』編纂までの過程

新旧両党の対立は、領袖である王安石・司馬光の歿後には泥仕合の様相を呈し、新法党が政権を奪還した際には、旧法党の党人は致仕や左遷に追い込まれた。蘇軾も例外ではなく、瘴癘の地とされる嶺南の惠州に謫せられたが、彼は悠然とその風物を楽しんだ。こうした姿勢が却って新法党の人々の敵愾心を刺激したためか、紹聖四年（一一〇九七）、蘇軾は海南島の儋州に再遷された。しかし、小川環樹氏が「かれの全集の中で、この時期の作品は（和陶詩のみでなく、すべてが）異常なまでに底深い光をたたえているのである¹¹」と評するように、苛酷な境遇にあつて彼の詩境は更に深化した。そして、『東坡後集』二十巻と『和陶詩集』四巻は、こうした蘇軾の後半生の詩文集を集めたもので、編纂時期をほぼ同じくするが、『東坡後集』中に『和陶詩』が採録されることは無かったのである。

(IV) 門人による別集編纂——劉沔・蘇過・王銍

蘇軾の『東坡後集』は『東坡集』と異なり、前段階の文集の編纂を多く経ることはなかった。しかし、陳師仲の場合と同様に、門人の劉沔が編纂した別集が基礎となったらしい。蘇軾は、その劉沔に次のような書簡を寄せた。

今足下所示二十卷、無一篇僞者、又少謬誤。及所示書詞、清婉雅奧、有作者風氣、知足下致力於斯文久矣。軾窮困本坐文字、蓋願剝形去智、而不可得者。然幼子過文益奇、在海外孤寂無聊、過時出一篇見娛、則爲數日喜、寢食有味。以此知文章如金玉珠貝、未易鄙棄也。見足下詞學如此、又喜吾同年兄龍圖公之有後也、故勉作報書。今足下の示す所の二十卷、一篇の僞たる者無く、又た謬誤少なし。示す所の書詞に及んでは、清婉雅奧にして、作者の風氣有り、足下の力を斯文に致すことの久しきを知る。軾の窮困するは本もと文字に坐し、蓋し形を剝きて智を去らんと願へども、得べからざる者なり。然れども幼子過の文は益ます奇にして、海外に在りて孤寂無聊なれども、過時に一篇を出して娛たのしめらるれば、則ち数日の喜びと爲り、寢食味有り。此を以て文章は金玉珠貝の如く、未だ鄙棄すること易からざるを知るなり。足下の詞学の此くの如きを見て、又た吾が同年兄龍圖公の後有るを喜び、故に勉めて報書を作る。

蘇軾「答劉沔都曹書」(『東坡後集』卷十四)

このように、蘇軾は、劉沔編の蘇軾の別集二十卷に言及し、僞作が無く謬誤も少ないと、編纂の精密さを称えた。この書簡は、嶺南に流謫されて以降のものであり、そうした時期や書簡の内容に鑑みて、この劉沔が編纂した蘇軾別集を基礎に、蘇軾とその末子蘇過が再編集と補撰を行って、『東坡後集』が成立したと考えられる⁽¹⁾。実際、秦觀(字は少遊)の末弟である秦觀(字は少章)が、蘇軾が詩文を創作する際に自らと共に蘇過が点検作業を担当したことを証言している⁽²⁾。蘇軾が嶺南に流謫されてからは、主に蘇過が担当したのである。更に、蘇軾は蘇過に対して、『東坡後集』編纂の補佐だけでなく、歿後の保管も委託した。蘇軾の晩年は、旧法党の学術や文学は禁じられ、蘇軾が歿した翌年の崇寧元年(一一〇二)には元祐党禁によって、取り締まりが一層厳しくなった。そうした状況下にあつて、劉沔や蘇過は尊敬する師父蘇軾のために『東坡後集』の成立に尽力したのであつた。そして、蘇軾の歿後であるが、他の弟子筋の中にも蘇軾の詩文を編纂せんとする人物がいたことを附記しておきたい。蘇軾の門人である李之儀が、その別集のために次のような跋文を書いている。

蔡君家世、輦轂之下、軒輊無所系、而能以退爲進、父子之間自爲知己。獨於先生南遷已後、所見於抑揚者。博

訪兼收、所較他日之得、爲備。吾友汝陰王性之、實與討論、仍爲手自抄錄、總若干篇、集成若干卷。性之將適宣城道太平、蔡君以書并其總目出。性之以相示、邀予爲之序。先生即世十餘年矣、門人之在者無幾。方其南遷、予適在左右。而又疇昔相期、蓋有獨得之重者乎。

蔡君の家世は、輦轂の下にありて、軒輊の系する所無く、能く退を以て進と爲し、父子の間自ら知己たり。独り〔東坡〕先生の南遷の已後に於いて、抑揚を見る所の者なり。博く訪ねて兼ねて収め、他日の得たるを較べる所をもて、備へと爲す。吾が友汝陰の王性之、実に与に討論し、仍ほ爲に手自ら抄録して、若干の篇を総べ、集めて若干の卷を成す。性之將に宣城道の太平に適かんとするに、蔡君は書并び其の総目を以て出だす。性之以て相示し、予の之の爲に序するを邀む。先生世に即きて十余年、門人の在る者幾くも無し。方に其れ南遷するに、予適ま左右に在り。又た疇昔相ひ期するに、蓋し独り之を得て重き者有らんや。

李之儀「仇池翁南浮集後序」〔姑溪居士後集〕卷十五

蘇軾は建中靖国元年（一一〇一）七月末に歿したが、その十余年後の政和四年（一一一四）、王銍（字は性之）が蔵書家の蔡氏の協力を得て『仇池翁南浮集』を編纂し、その跋文の執筆を李之儀に求めたのである。王銍は王昭素の後裔であり、父の王萃（字は樂道）は歐陽脩に師事した。李之儀「歐陽文忠公別集後序」〔姑溪居士後集〕卷十五によると、蔵書家でもあった王萃・王銍父子は手ずから『歐陽文忠公別集』二十卷を編纂したという。彼らと蘇軾との交遊は確認されないが、王銍は物故の蘇軾を慕って編纂活動を行ったのであろう。

（V）最後の蘇軾との唱和集——『和陶詩集』の一面

晩年の蘇軾が尊敬する陶淵明の詩文に和韻した「和陶詩」は、蘇軾晩年の代表作として殊に有名である。その端緒は元祐七年（一一〇九二）作の「和陶飲酒二十首」（『和陶詩集』卷一）であるが、ここでは和韻によって陶淵明の如き自由な隱遁を標榜する思いを詠んだに過ぎなかった。第二の和陶詩は紹聖二年（一一〇九五）に詠まれた。

三月四日、游白水山佛迹巖、沐浴於湯泉、晞髮于懸瀑之下、浩歌而歸。……歸卧既覺、聞兒子過誦淵明「歸園田居詩六首」、乃悉次其韻。始余在廣陵、和淵明「飲酒二十首」、今復爲此。要當盡和其詩乃已耳。
三月四日、白水山の仏迹巖に遊び、湯泉に沐浴し、髪を懸瀑の下に晞し、浩歌して帰る。……帰卧して既に覺め、兒子過の淵明「園田の居に帰る詩六首」を誦するを聞き、乃ち悉く其の韻に次す。始め余 広陵に在りしとき、淵明の「飲酒二十首」に和し、今復た此を爲る。要かならず当に尽く其の詩に和して乃ち已むべきのみ。

蘇軾「和陶歸園田居六首」(『和陶詩集』卷一)

このように、流謫された惠州において風物を楽しんでいた蘇軾は、蘇過の陶淵明「歸園田居六首」を誦する声を聞き、かつて詠んだ「和陶飲酒二十首」を想起し、全陶淵明詩に和韻することを決意したのである。この和陶詩創作の協力者は蘇轍であった。紹聖四年(一一〇九六)十二月十七日、蘇轍は、『和陶詩集』の序文を著した。

是時、轍亦遷海康、書來告曰「古之詩人有擬古之作矣、未有追和古人者也。追和古人則始於東坡。……吾前後和其詩凡百數十篇、至其得意、自謂不甚愧淵明。今將集而并錄之、以遺後之君子。子爲我志之。……」

是の時、轍も亦た海康に遷るに、書來りて告げて曰く「古の詩人に擬古の作有るも、未だ古人に追和する者有らざるなり。古人に追和するは則ち東坡に始まる。……吾 前後其の詩に和すこと凡そ百数十篇、其の意を得るに至り、自ら謂ふに甚だしくは淵明に愧ぢず。今將に集めて之に并録し、以後の君子に遺さんとす。子我が爲に之を志せ……」と。

蘇轍「子瞻和陶淵明詩集引」(『欒城後集』卷二十一)

このように、蘇轍は、蘇軾からの序文執筆依頼の書簡を引用した。そこで言及があるように、蘇軾は、この時点で百数十篇もの和陶詩を創作し、陶淵明詩と「并録」して後世に継承せんとしたのである。その結果、蘇軾は百二十四篇の和陶詩を詠んだが、そのうち元符三年(一一〇〇)二月二十四日作「和陶和郭主簿二首」(『和陶詩集』卷二)が最後の和陶詩であるため、元符三年(一一〇〇)には『和陶詩集』の草稿が完成していたと思われる。

現在、台湾国立中央図書館が所蔵する南宋黄州刊本の『和陶詩集』四巻が残存するが、これは陶淵明原詩、蘇軾和陶詩、そして、蘇轍和陶詩の順で各詩が並ぶ「唱和集」の形式を採ったものである。蘇軾は「和陶飲酒二十首」より以来、蘇轍に計六十五首もの和陶詩の継和を求めた。結果として、蘇轍は五十二首に和韻し、それらは『和陶詩集』に全て収められている。そこに、蘇軾の死から三箇月後の建中靖国元年（一一〇二）十月に創作した蘇轍の「追和陶歸去來兮辭」（『和陶詩集』巻四）もあることから、蘇轍による増補、もしくは再編が行われたと見なすべきであろう。蘇軾が最初に世に出した詩文集は、『南行集』という三蘇の同題や唱和の詩文を収録したものが、この『和陶詩集』も古人である陶淵明と蘇轍との唱和集であった。蘇軾にとつて和陶詩は特別な作品であり、『東坡後集』とは別に、唱和詩集の形式で読まれることを希望したのである。そして、蘇軾の歿後、『和陶詩集』は共著者とも言える蘇轍に託されたのであった。

小結——蘇軾の文学を支えた人々

『四庫全書』の蘇轍『欒城集』についての「提要」に、「蓋集爲轍所手定、與東坡諸集出自他人裒輯不同（蓋し〔欒城〕集は轍の手づから定むる所と為り、東坡の諸集の他人の裒輯するところより出づると同じからず）」とあるように、徹頭徹尾自ら編定した蘇轍と異なり、蘇軾は、門人である陳師仲・劉沔による別集編纂を経た上で、増補・校正を行い、杭州や開封を中心に『東坡集』『東坡後集』を刊行した。その際、弟の蘇轍や末子の蘇過も尽力している。特に、初期の『南行集』『岐梁唱和詩集』、そして、晩年の『和陶詩集』は蘇轍との共同創作であった。

つまり、蘇軾文学の源流たる『東坡集』『東坡後集』『和陶詩集』は、蘇軾を崇敬した親族や門人の献身的な協力によって成立したのである。その結果、烏台詩案や元祐党禁などの弾圧と迫害の時代を経ても、あたかも巨大な地下水脈のように、脈々と蘇軾の文学が読み継がれたのであった。

注

(1) 小川環樹著『蘇東坡詩集』第一冊(筑摩書房、一九六二年)の「はしがき」や、向島成美・高橋明郎著『新釈漢文大系 唐宋八大家読本 五』(明治書院、三〇〇四年)巻頭所収の向島成美「蘇軾の生涯とその作品集」等に、注釈・校訂に用いた諸書として整理されている。中国では、劉尚榮『蘇軾著作版本論叢』(巴蜀書社、一九八六年)や祝尚書著『宋人別集叙録上』(中華書局、一九九一年)、曾棗莊『蘇軾著述生前編刻情況考略』(『三蘇研究 曾棗莊文存之一』巴蜀書社、一九九一年)に詳しい。以下、〈東坡七集〉の底本を列記する。

- (1) 『東坡集』四十卷(宮内庁書陵部藏宋建安刻本、綾裝書局、三〇〇三年・匊齋校刊本校刊、台湾中華書局、一九七一年)
 (2) 『東坡後集』二十卷(同右)
 (3) 『東坡奏議集』十五卷(匊齋校刊本校刊、台湾中華書局、一九七〇年)
 (4) 『東坡内制集』十卷(同右)
 (5) 『東坡外制集』三卷(同右)
 (6) 『東坡應詔集』十卷(同右)
 (7) 『東坡先生和陶淵明詩』四卷(台湾国立中央図書館藏宋慶元間黃州刊本、中国書店、二〇〇八年)
- (2) 蘇轍の詩文は、『蘇轍集』全四冊(中華書局、一九〇九年)を底本とする。
- (3) 『東坡集』と『欒城集』の所収の詩については、蘇軾は千四百八十三首、蘇轍は千二百八十二首である。
- (4) 以下の()は編者と所収詩文の制作時期である。『南行集』については、曾棗莊『三蘇合著《南行集》初探』、湯淺陽子『「南行集」考』(『人文論叢 三重大学人文学部文化科学研究紀要』三十号、三〇三年)に詳しい。『岐梁唱和詩集』は、蘇轍「次韻姚孝孫判官見還「岐梁唱和詩集」」(『欒城集』卷三)に言及があり、曾棗莊「岐梁偶有往還詩」——二蘇合著《岐梁唱和詩集》初探」を参照。曾氏の論文は『三蘇研究 曾棗莊文存之一』所収。
- (5) 蘇軾「鄭州馬上別子由詩」の末句に「嘗有夜雨對牀之言、故云爾」と自注がある。蘇轍は次韻詩ではないが、「懷澗池寄子瞻兄」(『欒城集』卷二)を寄せ、蘇軾も和韻して「和子由澗池懷舊」(『東坡集』卷一)を返した。
- (6) 『南省說書』については、笈文生・野村鮎子著『四庫提要北宋五十家研究』(汲古書院、三〇〇〇年)参照。

- (7) 『烏臺詩案』の「御史臺檢會送到冊子」に「檢會送到冊子、題名是『元豐續添蘇子瞻學士錢塘集』全冊、内除目錄、更不抄寫、外其三卷並錄付」とある。
- (8) 『東坡集』『東坡後集』に未収録の蘇軾の散文は、『蘇軾文集』全六冊（中華書局、一九六六年）参照。
- (9) 注(1)に挙げた曾棗莊「蘇軾著述生前編刻情況考略」参照。蘇門六君子の一人の李廌撰「師友談記」に、李廌より一歳若く、後に范祖禹の推薦を受けたという章元弼がこの「眉山集」に夢中になる余り、妻の陳氏と離縁するに至る「王豐甫言章元弼讀『眉山集』出妻」の挿話が見え、そこに「初『眉山集』有雕本」とある。
- (10) 邵博撰「邵氏聞見後錄」卷十九に「蘇仲虎言『有以澄心紙東坡書者。令仲虎取京師印本『東坡集』、誦其中詩。卽書之、至「邊城歲莫多風雪、強壓香醪與君別。』東坡閣筆怒目仲虎云「汝便道『香醪』。』仲虎驚懼久之、方覺印本誤以『春醪』爲『香醪』也」とあり、元來蘇家有有したのは「京師印本」と判る。また、陳振孫撰「直齋書錄解題」卷十七に「東坡別集」四十六卷。坡之曾孫孫給事嶠季眞、刊家集於建安、大畧與杭本同。蓋杭本當坡公無恙時已行於世矣。」とあり、蘇嶠は、蘇軾の生前から刊行された杭州本を以て校正したと推察する。
- (11) 小川環樹「蘇東坡の一生とその詩」(『蘇軾上』、中国詩人選集二集第五卷、岩波書店、一九六二年)十頁より引く。
- (12) 曾棗莊「南宋蘇軾著述刊刻考略」(『三蘇研究 曾棗莊文存之一』)、その三四八頁に、「東坡後集」可能是蘇軾與其三子在劉沔所編二十卷詩文的基礎上編定。」とある。
- (13) 何遠「春渚紀聞」卷六「著述詳放故實」に「秦少章言『……某於錢塘從公學二年、未嘗見公特觀一書也。然每有賦詠及著議、所用故實、雖目前爛熟事、必令秦與叔黨諸人檢視、而後出』」とある。
- (14) 『仇池翁南浮集』は散佚している。蘇過も蔡家を訪問した(蘇過「夷門蔡氏藏書目叙」『斜川集校注』卷九)。
- (15) 王文誥撰「蘇文忠公詩編注集成」四十六卷(『蘇軾詩集』全八冊、中華書局、一九六二年)の説を採る。